

言葉に自覚的な保育者の育成を目指す授業内容の研究 — 「国語教育」の授業の取り組みから—

橋本祐治*

要約

「幼稚園教育要領」等において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のいわゆる5領域のねらいが示されている。これらを子どもたちの主体性を十分に引き出しながら育むためには、園生活全体を通じた様々な体験を積み重ねる中に「言葉の力」をつける「ねらい」を自覚し、子どもたちが環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導する中で「言葉の力」をつける資質と意欲が求められる。この資質と意欲を備えた保育者を「言葉に自覚的な保育者」とする。

本研究では、「幼稚園教育要領」において示されている、子どもの言葉の力についての目標や指導内容・方法を明らかにし、それを実現していくための、保育者の言葉への自覚の重要性について述べた。そして、「国語教育」の授業における「俳句作り」と「紙芝居作り」の取り組みにより、養成課程の学生自身の言語感覚が高まるとともに子どもの視点に立った言葉への理解が深まり、実習場面における言葉への自覚が高まった。さらに、保育者として働く際の、子どもたちの言葉の力を育むイメージをつかむことができた。

キーワード：言葉 主体性 自覚的 言語感覚

2020年9月21日受理

1 はじめに

子どもたちの生きる力を育む幼児教育の取り組み過程において、課題を解決したり生活をより豊かにしたりするために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けるには、言葉の力の育成が必要不可欠である。筆者は、小学校1年国語科における入門期の指導をした際に、子どもたち一人一人が入学までに獲得してきた言語能力を把握するとともに、その力を十分に発揮させることによって、自信をもって国語科の学習に取り組むようにすることを重視した。子どもたち一人一人の学習意欲を高め、持てる力を引き出すために教師の指導力によるところは大きい

が、入学時の子どもたち一人一人の言語能力の状況が、その後の学習に反映することは事実である。また、言語能力は、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」に大きく関わる非認知的能力の涵養に資するものである。したがって、乳児期から小学校就学までの6年間の言葉の教育を充実させることは、その後の子どもたちの言語能力のみならず非認知的能力獲得・向上の過程、さらには人生において重要な役割を果たすと言ってよい。

保育者は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」¹⁾を念頭に置きながら子どもたちの主体的な遊びや生活を引き出しつつ、「健康」「人間関係」「環境」

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：橋本祐治

〒690-0823 島根県松江市川津町 4280

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

E-mail:y.hashimoto@kenko-fukushi.ac.jp

「言葉」「表現」のいわゆる5領域²⁾のねらいをもって保育を行っている。ここに示されている姿を、子どもたちの主体性を十分に引き出しながら育むためには、保育者自身が言葉に対して十分な知識を持ち、深い関心と豊かな感性を身に付けているとともに、その資質を常に高めようとする意欲が必要である。さらに、園生活全体を通した様々な体験を積み重ねる中に「言葉の力」をつける「ねらい」を自覚し、子どもたちが環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導する中で「言葉の力」をつける力が求められる。「言葉に自覚的な保育者」とは、この資質と姿勢を備えた保育者を表している。

2019年4月1日に改正された教育職員免許法及び同法施行規則の施行に伴い、新たに履修内容の充実を図った教育課程が実施された。幼稚園教諭の養成においても、この新教育課程に基づき、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が設けられ、「イ 領域に関する専門的事項」と「ロ 保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)」の構成となった。2022(令和4)年度末までの経過措置期間、本学科においては領域「言葉」の「イ 領域に関する専門的事項」を「国語教育」によって指導している。

2017年3月末、改訂「幼稚園教育要領」が、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」³⁾(以下「答申」という)を受けて告示された。

本研究においては、言葉に自覚的な保育者を育成するために、まず「答申」の趣旨を踏まえた「幼稚園教育要領」の「言葉」領域において示されている、子どもの言葉の力についての目標や指導内容・方法を明らかにする。そして、そのための「国語教育」の授業内容を提案し、授業における取り組みが学生の自覚の高まりや実習場面にどのように活かされたのかを検討することを目的とする。

2 「幼稚園教育要領」の「言葉」領域について

(1) 「幼稚園教育要領」改訂の趣旨

「答申」では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに身に付けさせる「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、その基本方針を示している。

言葉の教育については、第1部-第5章-4に「言語能力の育成」の項を設けて、

子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言葉を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言語を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現したり、他者と関わったりする力を獲得していく。

とし、「言語能力は、こうした言語能力が働く過程を、発達段階に応じた適切な言語活動を通じて繰り返すことによって育まれる」と述べ、言語活動について、より一層の充実を図ることが必要不可欠であるとしている。また、

読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れ、これを疑似的に体験したり知識を獲得したりして、新たな考え方に会うことを可能にする。このため、言語能力を向上させる重要な活動の一つとして、各学校段階において、読書活動の充実を図っていくことが必要である。

としている。

さらに、第2部-第1章-1の「幼児教育」の項では、

近年、国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力といったものを幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究成果をはじめ、幼児期における語彙数、多様な運動経験などがその後の学力、運動能力に大きな影響を与えるという調査結果などから、幼児教育の重要性への認識が高まっている。

と述べている。

(2) 「幼稚園教育要領」における言語能力育成に関わる「ねらい及び内容」

言語能力における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」において、

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

とされている。保育者は、遊びや生活の中での体験や思考を通して、子どもたち自身が自ら文字などの役割に気付いたり、活用したりするような保育を展開することが求められている。

また、「言葉による伝え合い」においては、

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

とある。保育者との信頼関係の下に言語活動が展開される事は勿論であるが、その言語活動が多様で豊かなものとなるためには、保育者自身の「言葉への自覚」が不可欠である。

実際には、上述の姿を念頭に置きながら、「ねらい及び内容」に基づく保育活動全体を通して、子どもたちの言語能力を育む。保育者は、子どもたちの実態を十分に把握することによって、教材を準備し、環境構成をしつつ、子どもたちの主体的な遊びや生活を引き出そうとしている。そうした中で、常に「言葉に自覚的である」必要性について述べる。

「第2章 ねらい及び内容」の領域「言葉」の「2 内容」には、

- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。

とあり、子どもが言葉による表現をしたくなるともに、自分の欲求や疑問を率直に表現できるような

言語環境を整える保育者の役割の必要性が読み取れる。また、

- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

とあるように、子どもたちの生活すべての場面において言語能力を豊かにし、高めていくことが示されている。

つまり、5 領域を始めとする保育活動全体によって、子どもたちの言語能力を高めていくことが求められており、そのために保育者は「言葉に自覚的」でなければならないのである。

3 保育者に求められる自覚的な言葉の力

保育者は、どの年齢段階においても「ねらい及び内容」に基づく保育活動全体を通して、子どもたちの言語能力を育まなければならない。ただその場合、常に念頭に置かなければならないのは、「幼稚園教育要領」で指摘されている次の内容である。⁴⁾

しかし、幼児の発達には様々な側面が絡み合っており、相互に影響を与え合いながら遂げていくものである。各領域に示されている「ねらい」は幼稚園生活の全体を通して幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであり、「内容」は幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならない。

つまり、保育者には園生活全体を通じた様々な体験を積み重ねる中に「言葉の力」をつける「ねらい」を自覚し、子どもたちが環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導する中で「言葉の力」をつける力が求められるのである。

本項では、本学科学生の幼稚園実習の場面記録から、子どもたちの生活場面における保育者の支援等

について、「言葉の自覚」という視点で分析していく。

(1) 子どもの伝えたい気持ちを言葉にするための援助をする保育者の姿

登園後の自由遊びの時、朝の支度を済ませた M 児はいつものように友だちと一緒にままごとをして遊んでいた。その近くで、カルタをして遊ぶのが好きな A 児と R 児カルタをし始めた。その様子が気になったのか、M 児はままごと遊びの途中で、カルタをしている様子を見に来た。M 児が来たことに気付いた A 児が「M ちゃんはおままごとしてるから、見ちゃダメ！」と言った。それを聞いた M 児は泣き出し、A 児に手を出そうとした。私は M 児を制止して、両者の話を聞くことにした。

A 児の思いは、M 児はカルタを見に来るなら先にままごとの片づけをしてから来て、ということだった。M 児の思いは、カルタを少し見に来てただけだ、ということだった。A 児には「お片付けしてないことを教えてくれたんだね」と伝え、M 児には「カルタ楽しそうだから見たかっただけだよ」と伝え両者の思いを受けとめた。そして、お互いに気持ちを伝えられるように「先生に上手にお話してくれたね、お友達にもお話できるかな？」と声をかけ様子を見ることにした。A 児は思いをはっきり伝えていたが、M 児はその場から離れてままごと遊びに戻ろうとしていた。M 児に「A ちゃんまだお話しているよ」と声をかけたが、A 児の話を聞こうとする様子はなかった。その様子を見ていた保育者が M 児をもう一度 A 児のもとに連れてきて、M 児に「いやなことがあったらと友達を叩いてもいいんですか？」と聞いた。M 児は泣き出したが、保育者に「A ちゃんに何て言うの？」と声をかけられ、しばらく泣いた後 A 児に「ごめんね」と伝えることができた。保育者がずっと泣いていても分からないよ」「言葉でお話しよう」と M 児に伝えると、M 児は頷いていた。

その後 M 児はままごとに戻りいつものように遊んでいた。たまたま近くで A 児が椅子の位置を変えようとして椅子を持って歩いており、椅子が M 児の背中に当たってしまった。いつもなら泣いてその場を動かない M 児が、泣かずに私に背中に椅子が当たったことを伝えに来た。「ちゃんと言葉で言えたね！」と M 児が言葉で伝えたことを褒めた。M 児は A 児に椅子が当たったことを伝えることができていた。

(2019 年度 3 歳児クラスの幼稚園実習記録より 実習生 T.K)

実習生 T は、M 児と A 児のトラブル場面において、互いの思いを聞くとともに丁寧に言語化している。さらに子どもたちの主体性を大切にしながら仲立ちをしている。A 児にはその支援が功を奏したが、M 児には伝わらなかった。その場面を見ていた保育者は、M 児に対して、改めて言葉で伝えることの大切さを指導している。実習生 T も保育者も、自分の思いを伝えることの大切さを実際の遊びの場面において指導しようとしている点を評価したい。この場面での実習生 T と保育者の関わりがあったからこそ、

その後 M 児が A 児に「椅子が当たったこと」を言葉で伝えられたと考えてよいだろう。つまり、「言葉で伝える」ことを自分で実践することができたのである。

「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の「2 内容(3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする」に関わり、保育者(実習生)が自覚的に実践している場面だと捉えることができる。

(2) 子どもの言葉から自己肯定感を高めようとする保育者の姿

外遊びの時の話です。実習最終日、その日は前日の大雨で砂場や地面に大きな水たまりができて、いつもとは少し違う園庭の景色がありました。(中略: 筆者による)身支度が済み、2階から園庭につながる階段を降りようとベランダに出た時、K児が何か呟いていました。聞き取れず、もう一度尋ねてみると「カップ・・・」と言い、何だろうと思ひ、「どうしたの」と尋ねると続いて「前と同じ」と話しました。一瞬何のことか分かりませんでした。以前保育者が読み聞かせをした際に「みんなもこの前、雨の中レインコートを着て遊んだね。楽しかったね。またしようね」と話していた光景が蘇りました。K児が、前にも水たまりがある園庭で遊んだことがあって、その時の景色と同じだと伝えたいのだと感じました。そのことを感じた私は、「前にも遊んだことあったよね。その時のことよく覚えていたね。今日も大きな水たまりがあって、きっと楽しいよ」と声をかけました。K児は、少し微笑みながら頷いていました。

(2019年度 4歳児クラスの幼稚園実習記録より 実習生 E.S)

実習生 E は、K児の呟きを聞き漏らさなかつただけでなく、以前の読み聞かせの場面のことと結び付けた K児の気付きとそのことを伝えたい気持ちを感じ取り、丁寧に言語化している。まず K児が眼前の状況と絵本の状況をイメージとして同様に捉えることができたことが素晴らしい。さらに、それを「カップ・・・」さらに「前と同じ」と、言葉にできたことを実習生 E が捉えて認め、K児にその素晴らしさを伝えたことが保育者として重要な点である。

「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の「2 内容(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」に関わり、保育者(実習生)が自覚的に実践している場面だと捉えることができる。

以上、本学科学生の実習場面記録を事例として取り上げ、子どもたちの生活場面における保育者の支援等を「言葉の自覚」という視点で分析することによって、保育者が如何に日頃から言葉に対して自覚的であらねばならないかについて述べた。

4 「国語教育」における授業内容

保育のすべての場面において保育者は環境を構成する一要素である。それは、子どもたちの主体性を引き出し、高めるために最も大きな要素であると言ってよい。言葉に自覚的な保育者を育成するというときに、「国語教育」以外にも私自身が具体的な場面

を捉えて指導をし、手ごたえを感じてきた授業科目がある。それは、各「実習指導」である。「実習報告書」における実習の場面記録(エピソード記述⁹⁾)作成の個別指導をする際に、学生一人一人の捉え方を丁寧に受け止め、最も適切な言葉を選択させる指導をすることによって学生の言葉への自覚が目に見えて高まることを感じることが出来るからである。その基盤となる「国語教育」における、保育者自身の言葉への自覚を高めることを目指す授業内容は、次のとおりである。

(1) 授業全体の内容の概要

国語教育の意義や国語科教育の構造や内容(特に小学校 1 年)について、「幼稚園教育要領」における領域「言葉」を踏まえて理解することによって、子どもが言葉の力を獲得していく段階性と連続性を理解する。小学校 1 年の国語教科書を使って教材研究等を行うことによって、言語活動を通して「知識及び技能」「思考力、判断力等」「学びに向かう力」を育成することについて理解する。

(2) 授業修了時の達成課題

- ・生涯を通じた国語教育の意義を理解し、説明できる。
- ・小学校 1 年の国語教科書を使って、子どもたちが行う言語活動を想定して教材研究し、ロールプレイをする。

(3) 準備学習の内容

- ・言語感覚を豊かにし、高めるために毎回歳時記と俳句を書いて提出する。

(4) 授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法

- ・国語教育の意義
「人間の言葉の特徴」「言語文化と言語生活」「国語教育と国語科教育、国語科教育の変遷」について理解する。
- ・国語科教育の構造
国語科の「目標」「内容」「方法」「評価」について理解する。
- ・小学校入門期の言葉の学習
「紙芝居をつくろう」「[知識及び技能]に係る内容」「[思考力、判断力、表現力等]に係る内容」

5 言葉に自覚的な保育者を育てるのに有効な授業実践の例と考察

(1) 人間にとっての「言葉」の重要性の認識

学生は、これまでに小学校入学以来国語科を中心として言葉の教育を受けており、生まれて以来生活の中でいわゆる国語教育（日本語教育）を受けてきていると言うことができる。それによって、自らの言語能力を高め、生きる力を身に付けてきている。子どもたちの言語能力を育む保育者となるためには、改めて「言葉」が人間にとっていかに重要なものであるかを理解することが必要である。

中瀬正堯は「人間はことばを創造、発展させ、ことばによって人間になった」⁶⁾とし、人間が言葉や数の導く概念によって文明を発達させ、またその軌道修正も言葉の力によって行ってきたと述べている。私は、人間と言葉の強い結び付きを端的に表すこの考え方をまず学生に伝えなければならないと考える。この授業を受けた学生が「国語教育の意義」における「学修のまとめ」に次のように述べている。

言葉があるから人間なのだということを改めて認識した。言葉の意義と聞いて、第一に思い浮かぶのは、伝達性の部分だと思う。コミュニケーション

手段として、日常生活に欠かせないからだ。一方で、印象的だった学びとして、言葉は自分の内部で思考する際にも重要な役割を担っているということだ。口から音として発しなくても、頭の中で無意識に情報を言葉に変換して思考しており、メタ認知等の重要な能力にも大きな影響を与える。国語は、全ての学びの基礎になることを認識して、私たちは保育を考えなければならない。(K.T)

人間は、ことばを話し、相手とのコミュニケーションなどを通し更なる発展をさせたことで人間になった。ことばの学びの意義において、7つの重要なもの7)について学んだ。普段何気なくしていることを7つに分けて考えると、ことばによって人間になったことがよく分かった。／保育者として、今後0～6歳の子ども達と関わるうえで、小学校から始まる国語科をふまえ、子ども達の語彙が豊かになることで言葉による見方・考え方も豊かになると思った。基礎を養うために、乳幼児期のことばかけや絵本など言語生活も豊かに関わっていききたい。(U.Y)

いずれの学生も、人間にとっての言葉の重要性を具体的に理解していることが窺える。

(2) 俳句作りの実践について

保育者は、子どもたちと生活を共にしながら子どもたちの言語感覚を磨き、感性を豊かにする資質を身に付ける必要がある。そこで取り入れた内容が「俳句作り」である。藤井圀彦は『俳句の授業・作句の技法—どう教え、どう作るか—』⁸⁾において次のように述べている。

私は、教師に俳句を作ることをお勧めしたいと思います。俳句を作ることには、教師の教養にとって、さまざまなメリットがあります。このことは、俳句を実践してみれば自ら納得できることで

- ・じっくりと対象を見つめる眼を育てる
- ・認識（対象のとらえ方）を深める
- ・言語の正確な理解力と表現力を確かめる

- ・鋭い言語感覚を養う
- ・教材の解釈が深くなる
- ・互いに学び合うという人間関係を作る

挙げればきりがありませんが、およそ、このようなメリットがあることは、私の体験からもいえることです。教師は、日常生活において常に豊かな感覚を持ち、生き生きとしていることが大切でしょう。その一日の生活における新たな感動を一句に凝縮させて記録していくのです。この記録は次第に文芸としての俳句に高められていくことでしょう。

私は、小学校教諭時に藤井(1989)⁹⁾に学び、国語科の授業の中で「俳句を作る」ことを指導してきた。もちろんその際に自らも作っていたが、私自身の成長は別として、藤井(1998)¹⁰⁾が挙げたメリットは、子どもたちの成長する姿から実感していた。保育者となる学生には、ここに挙げられているメリットを可能な限り身に付けさせたいと考え、次のような方法で実践した。

- ① 学生は、A4判1枚の用紙上下で2句書ける用紙に、各回の授業までに、生活する中や自然の移り変わりでの新しい発見を「歳時記」としてまとめ、その内容から「俳句」を一句作り、授業の始めに提出する。
- ② 授業者は、前回授業で提出された「歳時記と俳句」の中から、4句程度を選んでA4判1枚に印刷したものを配付し、解説とともに紹介する。

2019年度の「国語教育」第15回授業において紹介した「歳時記と俳句」は次のとおりである。

- ・ 島根県保育所(園)・幼稚園造形作品展を見に行った。／色づかいや筆づかいなどから、そのときの気分や思いが伝わるような絵があり、すごいなと感心した。一つ一つ見ていくと、実習先の子どもたちの作品があり、絵とタイトルを見て、描いている姿が想像できてほほえましかった。会いたいなと思い、絵からいろんな思いが生まれたように感じた。

そこで一句 **子どもの絵 感ずる心 冬晴るる**
 また一句 **懐かしき 子どもの姿 思う冬**

- ・ 年が明けて二週間がたちます。相変わらず寒い日が続いていますが、今年はまだ雪が降りません。交通機関が乱れることもなく助かるばかりですが、子どもたちの思いは違うようです。近所の公園では、雪を待ちきれない小学生たちが、草と砂利しかない斜面を思い切りそりで滑って遊んでいました。積雪は、大人にとっては大変なことばかりですが、砂利に底をえぐられて既にボロボロになっているそりのためにも、一度くらいは積もってあげてほしいものです。

そこで一句

降らぬなら 先にしちゃおう そり滑り

- ・ 今日、児童文化で保育園に行ってきました。グループに分かれて自分たちでお話を作って準備をしてきました。私たちのグループは、二月が近いこともあり、パネルシアターで豆まきの話を作りました。部屋いっぱい子どもたちの笑顔と声が響き渡っていました。

そこで一句 **鬼は外 部屋いっぱいに 響き合う**

- ・ 先週末、用事があり大阪に行きました。島根とは違い、人も多くとても都会でした。朝早くに着いたため、カフェでモーニングを頼み用事までの時間を過ごしました。コーヒーを飲みながらゆっくりと過ごす時間もたまには素敵だなあと思いました。

そこで一句

コーヒーを 飲みながら待つ 冬の朝

ほとんどの学生は、俳句の鑑賞経験はあったが、作句したことがある者は2名(2019年度受講生38名)であった。「生活する中や自然の移り変わりでの新しい発見」をすることは、とても難しく感じたようである。授業の冒頭において、毎回違う4人の「歳時

記と俳句」を読み、一人一人の学生がどのような新しい発見をし、その感動を表すのにふさわしいと感じる言葉を選び、俳句にしているかを私自身の捉え方で解説するのである。作者自身の捉え方とのずれがある場合も多々あると思うが、そのこと自体が学生たちの物事の捉え方や言葉の捉え方を豊かにすると考えている。回数を重ねていくにつれて、徐々に何気ない生活場面や自然の移り変わりの中から新しい発見をすることができるようになり、それを表現する言葉をじっくり選ぶとする学生が増えていった。

ここに挙げた4人とも日常生活の中の「人・もの・こと」を丁寧に観察し、新しい発見をしている。それを凝縮した17音が読み手の想像力を掻き立て、それぞれの想像世界を楽しませてくれている。個々の学生の言語感覚が磨かれ、感性が豊かになりつつあることを窺うことができる。

この授業内容は、「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の「2 内容(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」や「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」ことに自覚的に関わる保育者としての資質を高める学修と捉えたい。

ここで、2020年度受講生のアンケート結果(41名)を示し、この授業内容の成果を考察する。

問1：毎回取り組んだ「歳時記+俳句作り」は、実習場面で生かされることがありましたか。
 ・あった(16) ・なかった(25)

問2：問1で「あった」と答えた人は、その内容を具体的に教えてください。

- ・ 歳時記を書くために季節を意識して生活をする事ができた。実習でも季節を意識した視点を持ったまま取り組むことができ、子どもへの言葉かけ(季節を感じられるような)につながったと感じるから。(K.A)
- ・ 表現する言葉を言い換えて、子どもが目で見えたものや自分が目で見えたものを、わかりやすく表現できた。例) 外遊びで雲が食べ物に見えた時、「くもだね」と言うのではなく、「○○み

たいだね」「○○にも見えるね」と例える。(K.N)

- ・ 身近にある自然に目を向けて、子どもがそこでどんなことを感じて考えて遊びを展開しているのか考えながら見る事ができた。(H.N)

「歳時記+俳句作り」の学修が実習場面で生かされたと感じた学生は、約39%で半数以下だった。しかし、「生かされた」と感じた学生の具体的な内容をみると、学生自身の言語感覚が磨かれ、感性が豊かになったことにより、子どもの言語生活を豊かにしようとする姿が窺える。

K.Aは、「季節を意識した視点を持って実習に取り組むことによって、季節を感じられるような子どもへの言葉かけにつながった」と捉えており、「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」働きかけを行っている。K.Nも、比喩表現を工夫することによってやはり「イメージや言葉を豊かにする」働きかけを行っていることが分かる。

H.Nは、身近な自然に目を向けることができるようになったことによって、子どもたちの感性や思考力と関連させて捉えられるようになっていくことが分かる。

問3：「歳時記+俳句作り」は、あなたが保育者として働く時に生かされると思いますか。
 ・生かされる(33) ・生かされない(7)
 ・分からない(1)

問4：問3で「生かされる」と答えた人は、生かされると思う内容を具体的に教えてください。

- ・ 身の回りの変化やその感動を子どもたちと共有できるし、伝えられる。(I.N)
- ・ 普段大人が気付かないようなことでも、子どもは気付くことが多くあると思う。歳時記を通して、気付かないことも気付くことができ、子どもが発見したことを共有できると思う。(K.M)
- ・ 今までは気付かなかったもの、気象、自

然などに親しみを持つことができるようになったため、その自分なりに気に入った、気になったものなど、自分なりの視点からの気づきを子どもたちにも共有していきけると思った。(M.K)

- ・ 子どもが自然に触れる中で、子どものつぶやきを聞き逃さないで、子どもがどう感じたのか捉え、考えながら関わることができると思った。(H.N)
- ・ 自分の見たものや景色などを言葉にすることで、子どもに説明する時や子どもが疑問を抱いたときに、様々な言葉で答えることができるのではないかと思った。(I.H)
- ・ 言葉の豊かさや語彙の増加により、子どもにもわかりやすく物事を伝えられる。(K.Y)

「歳時記+俳句作り」の学修が保育者として働く自分に「生かされる」と考えている学生は、約80%であった。その具体的な内容を見ると、学生自身が自らの言語感覚が磨かれたり、語彙が豊かになったりしたことを自覚し、そのことを保育に生かしたいと考えている。

I.N, K.M, M.K, H.Nは、自らの感性が高まったことによって、子どもたちの感じ方や考え方をより捉えられるようになったと考え、「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする」ために、子どもたちと共有することの可能性が広がったと考えている。

I.H, K.Yは、自らの語彙が豊かになったことによって、子どもたちに様々な伝え方ができるようになったと考えている。このことは、「(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」働きかけにつながっていくものと考えられる。

以上、学生のアンケート結果と考察から、継続した俳句作りの取り組みは、言語感覚を磨くことや言葉を通じた感性の高まりに対する学生の自覚を高め、保育における子どもたちの言語能力育成に資する可能性が高いことが分かった。

(3) 紙芝居作りの実践について

保育者は、小学校入学後の国語科学習がどのような目標の下でどのような内容が展開されるかを知っておくべきである。4月以降の子どもたちが主体的に学びに向かうためには、保育者がその学習の様子を認識して、就学前の保育を計画する必要があるからである。私は、小学校1年の国語教科書¹¹⁾をテキストとして、小学校入門期の国語科学習を子どもの視点に立って経験させることを取り入れている。ここでは、そのうち入門期の一番初めの教材を使った「紙芝居作り」の学修(15回授業のうちの第8・9回授業)を提案する。

① 学生の実態

保育実習と幼稚園実習をすべて終えて、就学前の子どもたちの言葉に関する具体的な様子やそれによる思考、友達との共同性について体験的に理解している。それまでの「国語教育」の授業において、自分の実習等での体験と理論とを照らし合わせ、子どもたちの言葉の力について理解を深めている。

② 教材¹²⁾について

教材の概要は次の通りである。

- ・ 題名「みんなのせかい」とされた見開き一杯に描かれた4枚の絵で構成されている。
- ・ 1枚目は、右側頁に「おや なにかな」と言葉があり、6人の子どもが小屋のそばの野原で遊んでいる。気球が飛んでいることに子どもたちが気付いた。
- ・ 2枚目は、6人の子どもたちが小屋の前で気球を作り始めたと思われる絵である。言葉はない。
- ・ 3枚目は、5人の子どもが乗った気球が地面を離れようとするところに6人目の男の子が食べ物を入れたバスケットを抱えて走ってくる。言葉はない。
- ・ 4枚目は、6人の子どもが乗った気球が空に上がり、他にも子どもたちが乗った気球が飛んでいる。子どもたちがいた小屋が小さく見えている。右頁の右端に「みんなともだち」、左頁の左端に「さあ いこう」と言葉がある。

各場面における6人の子どもの表情が豊かであり、一人一人の思いや呟き、会話をいろいろに想像できる。4場面が気球を主材にした「起・承・転・結」となっており、その中での子どもの関わりを想像しやすい構成である。また、各場面における情景や生き物が明るく楽しそうに描かれており、情景についての気付きも豊かにできる可能性がある。

③ 学生に身に付けさせたい力

- ア これまで自分たちが実習等で関わってきた5歳児の言葉や友達との関係、共同性等について具体的にイメージしながら、自らが子どもになって話を創造する力。
- イ 自分の想像したものをもとにグループのメンバーと話し合いながら協働して1つの紙芝居として完成させ発表する力。

⑤ 紙芝居の脚本事例と相互評価例

9グループに分かれて紙芝居を作成した。1グループの発表のための脚本を以下に紹介する。

〔配役〕＊登場人物の名前は自分たちで付けた。

- (I.A) ナレーション、友達
- (T.Y) ゆうた、ひろみ、羊
- (K.A) けん、さくら
- (M.H) かな、だいき、鳥

〈1枚目〉

ナレーション：ある晴れた日のことです。なかよし6人組は、花を摘んだり虫を捕ったりして楽しんでいました。すると、どこからか声が聞こえてきました。

友達：「おーい。」

ひろみ：「あれ？どこからか声がするね。」

さくら：「あつ、見て。あの風船じゃない？」

ひろみ：「あれって、気球ってやつだよ。」

けん：「うわー、ぼくも乗りたい。」

だいき：「あれ、作れそうじゃない？おれらで作ろう。」

他のみんな：「そうだ！そうしよう！」

ナレーション：こうして、みんなで気球を作ることが決まりました。あれ？ゆうた君とかなちゃんは遊びに夢中です。気球作り、するのかなあ。

〈2枚目〉

だいき：よし、まずは材料集めから始めよう。

ひろみ：あそこにあるあれ（車輪がついた箱）、乗りやすそうじゃない？私たち、取ってくるね。

ナレーション：ひろみちゃんとけん君が何かいいものをもってきました。

ひろみ・けん：「よいしょ、よいしょ。」

ひろみ：「頑張ろうね、あと少しだよ。」

ウ 育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や言葉の獲得に関する領域「言葉」の「ねらい及び内容」との関係性を常に考えながら、教材研究する力。

④ 授業展開

- ア 各場面の登場人物の呟きや情景描写について、自分(5歳児)が気付いたり考えたりしたことをできる限り多く付箋紙に書いて貼る。1枚に1つのことを書く。
- イ 4～5人のグループで自分(5歳児)たちの考えを出し合いながら、4場面構成の紙芝居を作る。
- ウ 各グループの紙芝居を発表し、感想を述べ合った後、入門期の児童がこの学習をする意義について話し合う。

けん：「みんなが待っているから頑張るね。」
ナレーション：そんなこんなで何とか気球が完成しました。

〈3枚目〉

かな「けん君こっちだよー！早く早く！」
だいき「けんも早く乗ってよ！」
けん「みんな待ってよー。空の旅にはやっぱり食べ物が必要でしょ？」
ナレーション：みんながつくった気球を見て羊さんも…
羊：「すげエエエエエエ。」
ゆうた：「風が強すぎて帽子が飛んでいっちゃうよ…。」
さくら：「とりさんこんにちは。私たち今から空の旅に行ってくるね。」
ナレーション：それに対して鳥さんも…
鳥：「いってらっしゃーい、楽しんできてね。」
ナレーション：さあみんなが気球に乗ったので、空の旅の始まりです。

〈4枚目〉

ナレーション：子どもたちはそれぞれ空の旅を楽しんでいます。
かな：「おーい！私たちも気球作ったよー！」
友達：「かなちゃん、気球できたんだね。」
けん：「ほーれ、花びらだぞーい。」
友達：「うわあああ、花びらじゃーん。すごおおおい。」
ナレーション：さっきまで少しおびえていたゆうた君も何だか楽しそうです。
ゆうた：「あ！さっきの鳥さんだ。」
だいき：「鳥さんに餌あげようよ、はいどうぞ。」
とり「びっぴっぴびびびびびび。」
ナレーション：鳥さんも「いいのつくってんじゃん」と言っています。
ひろみ：「さくらちゃん見て！向こうにも気球がいるよ。」
さくら：「ぎゃはははははははははははははははは。すごい楽しい！！」
ナレーション：彼らの旅はまだまだ終わりません。みんなで作った気球はどこまでいけるかな？

グループ毎の発表に対する相互評価の例を挙げる。

- ・ ナレーションが、みんなの思いを汲み取って話していて聞きやすかった。(A.Y)
- ・ 「骨組み」「一方」などの初めて聞く言葉が多く出ていて、ことばの興味につながるかなと思った。(U.Y)
- ・ 周りの自然にも注目されていた。(U.A)

他のグループの紙芝居発表から、子どもたち(学生自身)の発想の豊かさや意外性に気付いたという発表が多く、言葉に表すことによる感性や思考、判断の深まりや多様性に気付くことができる学修となった。

⑥ 学生が捉えた「紙芝居作り」で子どもが獲得する力

この授業内容は、「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の「2 内容(9) 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像をする楽しさを味わう」ことに自覚的に関わる保育者としての資質を高める学修と位置づける。

子どもたちが「紙芝居作り」の学習をすることによってどのような力をつけることができるのかを整理することによって、より言葉に自覚的な保育を展開する素地となると考えた。学生は次のように捉えた。

うとする姿勢が窺える。

K.N, F.H, K.H, M.Kは、子どもの視点で話を創造したことが、子どもの立場になって「言葉」を考えることにつながったと捉えている。A.M, K.Aは、紙芝居を発表したことの振り返りが、子どもたちに伝わるような表現の仕方の重要性の気付きにつながったとしている。いずれも、「(9) 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」ことの実際場面を具体的に理解していると言える。

問7:「紙芝居作り+発表会」は、あなたが保育者として働く際に生かされると思いますか。

- ・生かされる(41) ・生かされない(0)

問8:問7で「生かされる」と答えた人は、生かされると思う内容を具体的に教えてください。

- ・話し合いを複数で進める場面はたくさんあり、それぞれの役割分担も働く上で大切である。(A.E)
- ・紙芝居作り+発表会に取り組む中で、グループ内の学生同士で意見交換することができ、自分の気付きにはないことが分かり、協働して良い作品をつくることができた。(K.M)
- ・子どもに伝わりやすい内容や言葉選びをすることの大切さを知ることができたので生かしていきたいと思う。(K.H)
- ・文字で書かれていないことでも絵を見て、子どもたちと「○○かな?」「△△してるね」と、コミュニケーションを取りながら、想像力も高まっていくため、紙芝居作りで絵を見て物語を考えた活動は、絵本の読み聞かせの時に生かすことができると思った。(H.N)

学生全員が、「紙芝居作り+発表会」の学修が保育者として働く自分に「生かされる」と考えている。その具体的な内容を見ると、実際に紙芝居等を保育者が協力して作ったり、子どもたちと創作したりすることを想定し、想像することや話し合いの重要性

を指摘する者が多かった。

A.E, K.Mは、グループで一つの紙芝居を作って発表する過程で、他者の発想を知ることや協力して作り上げることの重要性を感じている。K.H, H.Nは、子どもの視点に立って言葉を考え、表現することが子どもの想像力を高めることにつながっていくことを指摘している。

以上、学生のアンケート結果と考察から、紙芝居作りとその発表会の取り組みは、領域「言葉」の「2内容(9) 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」ことを、子どもの視点から想像し作り上げていくとともに、それを子どもがどのように味わい楽しむかということについて体験的に理解することにつながったと言える。

6 まとめ及び今後の課題

本研究では、まず「答申」等の趣旨を踏まえた「幼稚園教育要領」において示されている、子どもの言葉の力を育むためのねらいや内容を確認した上で、そのねらいや内容を実現し、子どもたちの言葉の力を育むために、保育者自身が言葉に自覚的であることの必要性と重要性について、本学科学生の実習記録の分析をもとに述べた。そして、そのための保育者養成課程における授業内容について、本学科授業科目「国語教育」における、保育者自身の言葉への自覚を高めることを目指す授業内容を三つ提案し、それぞれ一定の成果を得ることができた。

一つ目は、学生が当然と思いながらも自覚的ではないと思われる「言葉」の重要性について、改めて認識させようとする授業内容である。二つ目は、歳時記の記述から俳句作りを繰り返して行わせることによって、保育者(学生)自身の言語感覚を磨き、感性を豊かにしようとする授業内容である。三つ目は、小学校入門期の教材を使った「紙芝居作り」を、学生が子どもの視点で実際に行うことによって、子どもの想像力や協同する力等がどのような言葉で表現されるかを疑似体験するとともに、その学習活動によって子どもたちにどのような力を付けることが可

能なのかを保育者の立場になって考えさせる授業内容である。

今後は、幼稚園教諭養成の新教育課程の下で、幼児期に育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や言葉の獲得に関する領域「言葉」の「ねらい及び内容」との関係を常に考えながら、「国語教育」の内容を基盤にしながらも授業科目の内容を再構築することが課題である。

参考文献

- 1) 片山美香他,「幼稚園教諭養成課程における領域『言葉』に関する専門的事項の授業内容の検討」,『岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊』,岡山大学, 2020

脚注／引用文献

- 1) 文部科学省, 厚生労働省, 内閣府・文部科学省・厚生労働省,『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)』, チャイルド社, 2018, p.8-9,p.32-3,p.63
- 2) 1) に同じ p.15-21,p.37-49,p.77-88
- 3) 中央教育審議会,『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』, 2018
- 4) 文部科学省,『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 2018, p.143
- 5) 鯨岡 峻,『子どもの心を育てる新保育論のためにー「保育する」営みをエピソードに綴るー』, ミネルヴァ書房, 2018
- 6) 中洲正堯,「国語教育の意義」,『新たな時代を拓く小学校国語科教育研究』, 全国大学国語教育学会編, 学芸図書株式会社, 2009, p.5-7
- 7) 6) に同じ p.5-7
①恣意性 ②分節性 ③生産性 ④転位 ⑤文化としての伝承 ⑥書きことばによる記録性 ⑦メタ言語性
- 8) 藤井圀彦,『俳句の授業・作句の技法ーどう教え, どう作るかー』, 明治図書, 1998, p.1
- 9) 藤井圀彦,『俳句をつくろう』, さ・え・ら書房, 1989
- 10) 8) に同じ
- 11) 小森茂他,『新編 あたらしいこくご 一上・下』, 東京書籍, 2014
- 12) 11) に同じ, pp.0-8

A Study on the Lesson Contents Designed to Train Pre-school Teachers Who Have a Consciousness of Words —From the efforts of a class on "Japanese language education"—

Hashimoto Yuji*

Abstract

In the "Kindergarten Education Guidelines" and other documents, the aim of the so-called five domains—"the form into which I want you to grow up by the end of infancy", "health" and "human relations", an "environment", "language", and "expression"—are shown. In order to fully nurture these, while fully drawing out the independence of the children, the children are involved in the environment, recognizing the "aim" of acquiring "the power of language" while accumulating various experiences through the kindergarten life. The qualities and motivation to acquire "the power of words" are required while providing comprehensive guidance through the concrete activities that are being developed. A childcare worker who has this quality and motivation is called a "word-aware childcare workers".

In this study, it is important for childcare teachers to be aware of the language in order to clarify the goals, teaching contents, and methods regarding the power of children's language, which are shown in the "Kindergarten Education Guidelines". The efforts of "haiku making" and "picture-story show making" in the "Japanese language education" class enhance the students' sense of language in the training course and deepen their understanding of the words from the child's point of view. And the consciousness of the language in the training scene increased. Furthermore, I was able to get a sense of nurturing children's language skills when working as a childcare worker.

Key words: language. independence, self-conscious, language-sensibility

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Hashimoto Yuji
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : y.hashimoto@kenko-fukushi.ac.jp